

熊本県球磨方言の“gotā”の用法

小野綾子

new2017a@gmail.com

キーワード: 球磨方言 gotā コーパス

要旨

本稿では熊本県球磨方言のコーパス中にみられる「gotā」の文法的性質と談話における機能を述べる。「gotā」は名詞、形容詞、動詞に続いてあらわれる。名詞そのものに続く「gotā」は少ない。名詞+助詞の形ででてくる「gotā」もあり、その際の助詞は =no、=N の2種類で、メタファー、例示、推量など発話者の思いを表す。形容詞に続く「gotā」は説明、回想、確信、推量の意味をもつ。「gotā」は動詞の連用形と終止形につく。また、「gotā」の用法としては否定形や勧誘形がある。動詞+助詞の形ででてくる助詞は =do である。

はじめに

本稿では球磨方言の中に出てくる gotā について扱う。gotā は一部の方言の中の発話にあらわれ、gotō +ar-i と関係があると思われるが、用法まで扱った詳しい研究は見つかっていない。そこで、本稿では球磨方言で使われる gotā の種類と用法について述べる。

球磨方言とは熊本県人吉・球磨地方(人吉市、錦町、あさぎり町、多良木町、湯前町、球磨村、山江村、相良村、水上村)で話される言葉であり、東南を宮崎県と鹿児島県に接している。これまで球磨方言に関する記述そのものがほとんどないため、501.6分の発話を文字化しコーパスを作ったものから用例を抜き出した。本稿では gotā 用例の紹介を中心としている。しかし、その中で疑問に思える例がいくつかみられたため、第4節で問題提起をした。

以下、gotā の表記について、本文では用例に合わせて “gotā” あるいは「gotā」と表記している。球磨方言話者の特に高年層世代でよく使われる「gotā」は用法、意味ともにバラエティに富んでおり、名詞、形容詞、動詞の後に続く。「gotā」は名詞と動詞に続く例が多くみられる。名詞そのものに直接「gotā」が続く例はまれであり、名詞+助詞+「gotā」の形ででてくる。動詞の場合は、動詞そのものに続く例が多く、今回、動詞+助詞としてみられたのは =do 一例のみであった。

本稿で扱うコーパスについては、人吉在住の郷土史家である前田一洋氏の所蔵する球磨方言会話の録音資料を一部お借りしたものと、それに加えて、前田氏と筆者が共同で録音した計 501.6分の会話のもとになっている。その会話の全てを筆者が文字化し、一回の発話を一行とみなし、計 12254 行の中から用例を抜き出して説明を加えた。(言語資料、インフォーマントについては以下で述べる) 必要に応じて、用例とは別にネイティブチェックも行い、理由とともに言及している。

1. 言語資料とインフォーマント

1.1. 言語資料

本稿では、球磨方言の録音を文字化した資料を基にしている。球磨方言をインフォーマントとした録音資料に加え、ネイティブチェックを行い分析する。インフォーマントは録音をした時点で、子供時代にメディアの影響を受けていないと思われる高年層世代を対象としている。以下で録音資料について詳しく述べる。

1.2. インフォーマントと録音資料

本資料のインフォーマントは次の四人である。M(1935 生、男性)、三姉妹である L 1 (1915

生、女性)、L 2 (1920 生、女性)、L 3 (1925 生、女性 : kb.4 のみ)。

録音資料は 6 本のテープ(kb.1~6)に収録している。録音者は kb.1~4 が前田一洋氏のみであり、kb.5、6 が前述の前田氏と筆者である。

この中で、三姉妹の末っ子である L 3 は kb.4 のみ発話に参加している。kb.4 の発話で L 3 からの用例が多いのは単に発話回数が多いからである。この姉妹は姉妹そろそろと妹の発話回数が多くなる。

<u n="0362" sp="L 3"> maa okage=de</u> 「(話の続きでMに) まあ、おかげで、」

<u n="0363" sp="L 1"> maa joo oQ-baQka sjabeN=na omae sjaber-an=de ee</u>
「(末妹 L 3 に) まあ、よく、あんたばかり しゃべるね。あなたしゃべらないで いい。」

1.3. 表記法

「一回の発話を一行」として文字化した。発話の前に <u n="数字"sp=名前> と表示している。「数字」は「行番号」、「名前」は「発話者の名前」であるが、ここでは男性 M と三姉妹 L 1, L 2, L 3 と表記する。なお、ファイル kb.1~6 までの行数と時間は次のとおりである。本稿で用例として挙げる文はこのファイルと行番号を載せ、必要に応じてネイティブチェックを行い作例を挙げる。

表 1 発話文字化行数

ファイル名	行数	時間 (分)
kb.1	2,676	101.5
kb.2	2,745	92.8
kb.3	851	51.0
kb.4	2,428	87.5
kb.5	3,229	146.2
kb.6	325	22.6

1.4. 品詞と形態素分析

本稿では、紙面の関係上、発話のでてきた用例のあと「共通語訳」という表記にとどめているが、分析内容によっては表記を変えることもある。なお、以下の例の -oQ- は特徴のある複語尾なので、ここではそのまま表記している。拗音などヤ行を含むものは /j/ で表し、撥音 /N/、促音 /Q/、助詞は「= 助詞」とした。助詞「を」については、[wo]、[o] の両方の発音があり、後に役立つかもしれないことを考え発音どおり書き分けている。長母音は母音を重ねている。「:」は融合である。以後、用例に関する記述は角田太作 (1988:999)、角田三枝 (2007) を参考にし、以下のような例では「-つ-」を「つなぎ接辞」として考える。

例 kmb.3, 154 行目
/ (略) na-i-oQ-ta=na /
動詞-つ-oQ-過去=終助詞
「(略) (柿が) なっていたね」

2. 「ごた」(“gota”) の歴史的変遷と先行研究

“gota” の歴史的な流れについては、はっきりと証明できるわけではないが、goto+ar-i と関係があると思われる。しかし、これまでの日本語研究、特に方言研究で gota について詳しく扱った資料も文献も見つからなかった。一部近年の文献で gota の用例のみ紹介してあるものもあったが、一文だけで発話状況がわからないものや話者情報のないものも多く、さらにその用法についての詳しい言及もなかった。よって、本稿では自然な会話を録音したものでコーパスを作り、その中から自然な形で使われる gota を含む文を抜き出した。さらに、

用例の情報を明示し、なるべく発話状況もわかるよう説明を加えた。本稿の目的は球磨方言の発話にみられる gota の紹介である。その用法を述べるために、関わりがありそうな以下の研究を参考にした。

築島 (1987:233-234) によれば、「上代から「ごと」だけで独立して (略) 用いられた例は多く、平安時代に入っても、引き続き行われていた。(略) 語尾の附いた「ごとし」「ごとく」「ごとき」の形も、上代から例があり、平安時代に入ってから (略) 若干の例が見えるが、源氏物語では、殆どが漢文訓読文の引用など、特別な例に限られてしまう。」という。

坂詰 (2011:364) は「ごとし」の意味的役割について、「比況の意を表す助動詞「ごとし」は平安時代にあつては (略) 漢文訓読文に用いられた。「ごとし」は活用語の連体形か、「…のごとし」「…がごとし」のように格助詞「の」「が」に接続するのが一般的であるが、中世に入ると体言に直接付く用法が見られ、(略)」と述べている。

築島 (1987:233-234) によれば、「(略) 漢文の訓読においては、「ごと」の語幹だけの用法は全く見られず、「ごとし」「ごとく」「ごとき」、更に未然形として「む」を伴った「ごとけむ」の形が行われ、更に「あり」「なり」を伴った「ごとくあり」「ごとくなり」の形が発達した。」という。

本稿で論ずる “gota” は “goto” と “ar-i” の問題も関わってくる。山田 (2000[1950]:35) は、「あり」について、「この「あり」の如きものを先づ他の用言と区別することにすれば古来からの難点を処理することが出来るであらうと思ふ。」とも述べ、加えて山田 (2000[1950]:35-36) では、「有り」について、「形式用言」としての働きを「有り」は具体的属性の認められぬものであるから、之を形式用言と名づけ、その他のもの即ち具体的属性の認めらるる用言を実質用言と名づくる時に、われわれは古来の難問であった「あり」の処置に惑う所が無いであらう。(略)「有り」の外にも形式用言と認めてよいものもあることを見る。それは「如し」といふ語である。」という。

以上の先行研究をふまえ、“gota”は古来からの流れを継いでおり、簡単には割り切れないものであることをふまえ考察する。球磨方言では“gota”がどのように自然な会話の中に息づいているのか、どのような働きがあり、それがどのような作用を引き起こすのかについて自然な会話からの用例を挙げながら考察する。

3. 本論

球磨方言は現代語といえど、共通語とは異なる仕組みをもっている。インフォーマントである L1 (1915 生)、L2 (1920 生)、L3 (1925 生) 三姉妹と M (1935 生・男) は子供時代、メディアの影響をほとんど受けず、行動範囲も人吉・球磨地方に限られた。Mのみ学生時代を熊本大学で過ごしているが、三姉妹は人吉・球磨地方で生まれ育ち録音時に至っている。

3.1. 発話資料の中の “gota”

3.1.1. “gota”の出現頻度

発話時間合計 501 分 6 秒のファイル kb.1~6 の中で、“gota”の出現度は以下の通りであった。

表2 ファイル kb.1~6 における“gota”出現数と行番号

ファイル名	出現数 (数字は行番号)
kb.1	12 (0170,0344,0365,1310,1413,1647, 1817, 1826, 2110, 2151, 2171, 2344)
kb.2	19 (0050, 0116, 0134, 0301, 0342, 0359,0476, 0709, 0788, 1110, 1213, 1315, 1520,1614, 1964, 2153, 2184, 2271, 2602)
kb.3	10 (198, 224, 227, 228, 230, 250, 270, 300, 581, 771)

kb.4	29 (0069, 0264, 0282, 0333, 0450, 0454, 0576, 0602, 0616, 0624, 0637, 0638, 0655, 0697, 0719, 0895, 0920, 0935, 1117, 1633, 1679, 1798, 1952, 2079, 2200, 2286, 2342, 2345, 2396)
kb.5	42 (0321, 0384, 0385, 0457, 0480, 0569, 0613, 0667, 0758, 0794, 0808, 0812, 0941, 1212, 1229, 1403, 1408, 1505, 1515, 1546, 1548, 1559, 1560, 1679, 1687, 2008, 2126, 2185, 2267, 2366, 2616, 2630, 2644, 2801, 2833, 2839, 2841, 2858, 2869, 2988, 3139, 3153)
kb.6	4 (143, 171, 173, 314)

3.2. "gota"の出現場所

"gota"は名詞（名詞+助詞、名詞のみ）、形容詞、動詞（動詞のみ、動詞+助詞）に下接した形で出現する。それぞれの出現数は次のとおりである。

表3 名詞、形容詞、動詞との "gota"下接数

ファイル名	名詞	形容詞	動詞
kb.1	7	3	2
kb.2	8	0	11
kb.3	3	4	3
kb.4	10	4	15
kb.5	19	2	21
kb.6	1	0	3

それぞれの品詞にどのように下接しているのか、会話中の用例を示す。

3.2.1. 名詞：“gota”が名詞+助詞、あるいは、名詞のみに下接する例

"gota" が名詞+助詞、名詞に下接する例は次の三タイプである。以下、助詞は (=) で表す。φ は助詞を伴わない（名詞のみ）を表す。

名詞+ =N + "gota"

名詞+ =no + "gota"

名詞 φ "gota"

それぞれの出現数は以下の通りである。

表4. 名詞+助詞：助詞の種類と数

ファイル名	=N	=no	φ
kb.1	1	6	-
kb.2	3	5	-
kb.3	-	2	1
kb.4	2	4	4
kb.5	6	13	-
kb.6	1	-	-

上記のデータをみる限りでは、名詞 =no gota としてでてくる例が多いが、=N と =no の違いは直前の名詞の音韻によるものが大きい。しかし、将来の助詞の分析でそれだけではない理由が見つかるかもしれないため、異なる助詞として考える。以下のように同じ語彙で =N, =no の両方が使えるものもある。

(1) kb.3 <u n="198" sp=" L 1 ">

zjaaQ=tai hoNtoN=bai sositari jaQpa naa ba-saN-tati=no a-gjaN minomusi=no-gottaQ-to o-i-ja-i=doN</u>

「そーよ、ホントよ。そしたり、やっぱり、ねえ、母さんたちはあんなミノムシのようにしていたけれど、」

(2) kb.5 <u n="2988" sp="L 2 ">
 minomusi=N-gotaQ-to ki:toQ-te=tai</u>
 「ミノムシみたいな（服）を着ていてね、」

3.2.1.1. 名詞 +=N gota

(3) 例文(2)と同じ

“gota”は比況を表す。L 2は自身の母親の話をしており、母は寒いときに重ね着して、まるでミノムシのようだったと話している。この比況は見た目についてのものである。

(4) kb.5 <u n="0385" sp="L 1 ">
 mukasi=N-gotar-e=ba jok-a-baQteN=naa</u>
 「昔みたいだったらいいんだけどねえ。」

“gota”で発話者の経験を伴った比況である。ここでは、L 1(1915 生)が、自分達の子供時代は家族や近所での交流が多かったと昔を懐かしむ発話である。なお、録音資料中では、名詞 =N gota は次のものがある。(同一語彙は省く)

kim.1
 kinako (きな粉)
 kb.2
 ima (今)、kodomo (子供)
 kb.3
 minomusi (みのむし)
 kb.4
 kakureNbo (かくれんぼ)
 kb.5
 mukasi (昔) dago (団子)
 kb.6
 koko (ここ)

3.2.1.2. 名詞 +=no gota

(5) kb.5 <u n="1559" sp="L 1 ">
 jeigo=no-gota-goza-Ns-u=mo</u>
 「英語みたいでございますもの」

<u n="1560" sp="M ">
 eigo=no-gota</u>
 「英語みたい」

“gota”は比況である。「球磨方言の早口も英語みたいでしょ」というL 1の発話である。この場面では、L 1が球磨方言の早口言葉を紹介したり、姉妹で母親から英語を習ったという話をしている。Mに対して、たびたびL 1(1915 生) L 2(1920 生) 姉妹が、「私の母はあんな昔なのに、ちよろちよろ英語も話していたんですよ」と言っており、Mが「へえ」と感心すると、姉妹は、自分の母親は「もち米を餡で包んだもの」を「nakamesi-gururi-jaaN(ナカメシグルリヤーン)」と英語で言っていたと答え、さらに、「母は、「ワタモチ」(という語)は、いつも英語で言っていました」と回想している。Mは「それは(イングリッシュじゃなく

て) ヘングリッシュというんですよ」と笑うが、L 1, L 2 姉妹は、自分達の母親がときどき英語も混ぜて話していたと信じており、そのため、方言で英語風の早口言葉も話せると話していた。

なお、録音資料 kb.1~6 の中で =no をとる名詞は次のものであった。

kb.1

heizo (兵ぞ?)、takimoN (薪)、manzjuu (饅頭)、 uso (嘘)

kb.2

teQkjoo (鉄橋)、isigaki (石垣)、 minomusi (みのむし)、 hi (火)、 bakudaN (爆弾)

kb.3

seeraa-huku (セーラー服)

kb.4

tukudani (佃煮)、takeNma (竹馬)、iwao-saN (イワオさん：人名)

kb.5

o-niNgjo-saN (お人形さん)、 minjoo (民謡)、 gaaze (ガーゼ)、 are (あれ)、
beNtaroo-saN (べんたろうさん：人名)、 tada (ただ)、 jeigo / eigo (英語)

(6) kb.5 <u n="1227" sp="L 2">

mizu=N-toki jaQpa tame-no-mos-u=tai=na</u>

「(マルパネというものは) 増水のと、やっぱり、(水を) ためるのですのよ。」

<u n="1228" sp="M">

aa haa</u>

「ああ、はあ。」

<u n="1229" sp="L 1">

are=no-gota-sur-u=ba=naa</u>

「あんな風 (マルパネ) にしたらねえ。(洪水にならないわよね)」

gota は例示である。L 1, L 2 姉妹がM氏に、球磨川の洪水を防ぐ「マルパネ (水が別の方向に流れたり、別の場所にたまるような堰みたいなしかけ)」というものについて説明しているときの会話である。妹L 2が「マルパネ」について説明した発話を受けて、姉L 1も発話している。

3. 2. 1. 3. 名詞 gota

名詞に直接下接する”gota”は非常に少ない。

kb.3

goboo-basi=no-joo-na (御坊橋のような)

kb.4

husizeN-na (不自然な)、jok-aQ-ta-ta (良かった)、 nusaN (大変、嫌)

本稿では形容動詞という品詞をたてず、na を名詞「こと」として扱う。久野 (1973:75) は「名詞「本」を形式名詞「ノ」で置き換えることができる。」というように共通語について説明をしているが、球磨方言でも原理は同じである。”gota” が名詞 na に付いている場合を以下で例示する。

(7) kb.4 <u n="0454" sp="M">

anoo hu-sizeN-na-gotaQ-des-u=de</u>

「あの、(なんだか) 不自然ですよ。」

この会話は、L 1、L 2、L 3 三姉妹が自然に話している会話を録音したいMの発話である。Mは、「三姉妹で自然に話して欲しいのに、他人の自分（M）が見ていると、皆さん、なんだか不自然な感じですね。」というニュアンスで笑いながら話している場面である。この“gota”は発話者自身の思い、様子を表している。

(8) kb.4 <u n="0637" sp=" L 3 ">
asobi=wa soN-kuree-na gotaQ-ta=naa</u>
「遊びはそのくらいだったなあ。」

これ以前の会話で、三姉妹は子供時代に自分達がしていた遊び（ramuneNtama（ラムネの玉をぶつける遊び）、suQkeNgjo（片足でとぶ遊び）、zoromeN（絵のついた紙を打ち付けて相手の紙を裏返す遊び）、sjako（お手玉）など）の話をしており、この発話（8）までに様々な遊びを列挙しているため、“gota”は前の会話を受けた回想といえる。

(9) のように名詞 ta もあり過去形の文を ta で名詞化したものと考えられる。

(9) kb.4 <u n="0616" sp=" L 3 ">
hoo kado=no ki-i:toQ-ta naNka i nage-ta-toki=ni tomaQ-te-des-u=keN=nee
so-gjaN-to=wa era-i jokaQ-ta-ta-gotar-u</u>
「ほら、角のきいていた、なんか、い、投げたときに止まってですからね。
そんなのはとても良かった。」

この“gota”は説明のようでもあるが、相手に伝えたいのは説明の内容ではなく、発話者自身の気持ちであり、さらに“gotar-u”と文末で断定しているため、発話者の強めの気持ちを表している。

次に(10)で名詞に続く“gota”の例を挙げる。nusaN は状況によって様々な意味に捉えられるが、ここでは「大変」という意味に解釈する。

(10) kb.4 <u n="2079" sp=" L 3 ">
hoNto=ni moo nusaN-gotaQ-ta kus-oo=wa ar-u. iQ-kakar-aN-goto wa=ja so=de=nja</u>
「本当に、もお、大変だった。臭くはある。（こやしが）かからないように。わたしはそれでね、」

話題は学校へ行くときに川を渡るときに馬舟（馬やこやしを運ぶ舟）しかなかったときの昔話である。ここでも文末で断定をしているため、発話者の思いを“gota”で強める働きをしている。

3.2.2. 形容詞：“gota”が形容詞に下接する例

3.2.2.1. 録音資料中の形容詞+“gota”

ここでは“gota”が形容詞に続く例をあげる。形容詞は次のものがある。

- kb.1
tik-oo（近く）、umak-a（美味しい）、nak-a（ない）
- kb.3
itak-a（痛い）
- kb.4
kusak-a（臭い）、jok-a（良い）、oQtos-ik-a（恐ろしい）
- kb.5
taQk-a（高い）

次に用例を挙げる。

(11) kb.1 <u n="0170" sp="L 1 ">
oNseN-mati=ga tik-oo-gota-mos-u</u>
「温泉街が近いです。」

これはL 1 が自身の出身地を、Mに説明している場面の一文である。直前に地理的な説明をしているものに、さらにL 1 自身の知識を加えた発話であるので、“gota” は発話者のほぼ明確な知識の説明に使っている。

(12) kb.3 <u n="227" sp="L 1 ">
taNmono=wa ki-ta-kota aNma nak-a-gota</u>
「反物（着物）を着たことは、あんまりなかった。」

姉であるL 1 が子供のころ自分達姉妹が着ていたものを、Mに話しているところである。直前で、妹L 2が「あまり覚えてない」というので、代わりに姉L 1 が子供時代の記憶をたどって説明している。L 2の五才上の姉L 1 はすぐに答えているので、記憶がはっきりしていることを強めた回想であるが断定ではない

(13) kb.3 <u n="270" sp="L 2 ">
karaimo=N ki-ku-u-te=na hoQ=de Nmak-a-gotaQ=de=jo</u>
「サツマイモ食べてね。それで、美味しかったのよ。」

ki- はku-u（食べる）につく接頭辞である。この発話は、妹であるL 2 が子供時代のことを、Mに話している。直前で、姉のL 1 が「食べるものが色々なかった」と発話した直後に、妹のL 2 が「サツマイモやらよ」と姉に話しているので、L 2の記憶ははっきりしている。サツマイモの話をした後のMの感嘆詞の後に、この発話がきているため、“gota” は記憶のはっきりした発話者の思いを表している。文末には断定を表す終助詞の=deに加えて、=jo もあるため、自身の気持ちの表れであるとわかる。

(14) kb.5 <u n="1687" sp="M">
hoNto=wa haQ-te-ik-o-gotaQ-toki=mo aQ-ta=de-sjo=tai</u>
「本当は（あなたがたのご両親は、たとえ行きたくなくても）はってでも（仕事に）行った日もあったでしょうよ。」

この発話は、Mが、L 1、L 2 姉妹の両親のことを（Mの）推測で話している。gota は比況の役割をもつ。直前の発話では、L 2が「自分達の両親はどんなときも仕事に行っていた」と話していることから、Mがその発話を受けて、L 1、L 2 姉妹の両親を想像して発話している。

3.2.3. 動詞：“gota” が動詞、あるいは動詞＋助詞に下接する例

動詞そのもの、あるいは、動詞＋複語尾に下接する例。なお「:」は融合である。

kb.1

i-i-nahar-aN（おっしゃらない）、gama=N-das-i-naQ（頑張りなさる?）

kb.2

kik-oe-N（聞こえない）、i-i-nahar-e-ta（おっしゃった）、

-ti:o-i-mos-i-ta（と言ってました）、na-N-nahar-e-ta（おなりになった）、om-o（思う）、

aQ-ta（あった）、nar-u（なる）、ik-oo（行こう）

kb.3

oBoe（覚え）、uta-u（歌う）、uti-kur-e（あげる）、uti- 接頭辞、kur-er-u（あげる）

kb.4

si-jar-u (する、主語は姉)、tju:-u (という)、ku-i-jor-aN (食べていない、主語は母、過去)、se-N (しない)、iw-ar-eN (言えない)、ju-u (言う)、ti:-N (と言う)、sjabeQ-ta (しゃべった)、ti:o-i-mos-i-ta (と言いました)、i-i-oQ-ta (言っていた)、si-jor-aN (していない)、si-joo (しよう)、manio-o-tor-u (間にあっている)、hazur-e-ta (外れた)、iQ-kakar-aN (かからない、iQ- は接頭辞)

kb.5

ku-oo (食べよう)、uQ-tin-i-jaQ-ta (死んでしまった、uQ-は接頭辞、主語は夫)、mi-joN-na-e-ta (ご覧になっていた、主語は一般人)、nak-oo ((感動して)泣きたい)、ik-u (行く)、naoQ-t:oN-nah-aN (移っていらっしゃる、主語は鋸屋)、aQ-ta (あった)、haQ-te-ik-oo (這っていく)、mak-i-joQ-ta (巻いていた)、kaw-as-e-jor-ar-e-ta ((話者に)(義父が)買わせていた)、ko-o-ta (買った)、saruk-i-joN-na-i-ta (歩いていた、主語は昔の花嫁)

kb.6

(tak-oo)-naN-nah-ar-e-ta ((背が高く)おなりになった、主語はお客さん)

3. 2. 3. 1. 録音資料中の“gota”が動詞に下接する例

なお、ここでの動詞は連用形、終止形、否定形、勧誘形(『日本語文法辞典』2014:136)、過去形、動詞+複語尾 (-mos-, -jor-, -jar-, -or-, -nar-, -nahar-,) である。次に用例を挙げる。

(15) kb.3 <u n="581" sp="L 2">

mo soN hito=wo mi-re=ba zibuN-jok-a jok-a seikwatu-si:toN-nahaQ-to=zja-baQteN

moo uti-kur-e-gotaQ-to=tai=na naN=demo uN</u>

「もう、その、人を見れば、自分よりも良い生活をしていらっしゃるのだけれど、もう、あげてしまうのよね。なんでも。うん。」

L 2は人に物を贈るのが大好きだと言う話をしており、作った漬けものを人に配るのが生きがいとMに話している。L 2は直前の発話で、実際に漬けものをタクシー会社の職員さんたちに配ったという話をしてるので、“gota”は経験を表している。なお、kur-eは共通語の「(物などをあげる)」の意味であり、ここでは連用形となり、活用は次のとおりである。

kur-e-, kur-e-, kur-uQ (kur-ur-u, kur-u), kur-uQ (kur-ur-u),

kur-ur-e (kur-ur-u), kuQ (kur-e)

(16) kb.5 <u n="1212" sp="L 1">

araQ kumagawa=no ano hoNrjuu=no asuke: ataQ-te aQti-sa=ni ik-u-gota</u>

「あれは、球磨川の、あの、本流のあそこ(マルバネ)に(水が)当たってあっちに行くために。」

“gota”は目的を表す。動詞の終止形に“gota”が続いている。なお、ここでの -sa は方向を表す。ここでの内容は、球磨川の洪水対策についての話である。川が増水したときに、流れを分散させるしかけとして、川岸にマルバネがあると云っている。

(17) kb.4 <u n="0602" sp="L 3">

hee odoma: gaQta=jara ramune=N-tama=wa seN-gota=ta=naa</u>

「へえ、あたしは ガッタやらラムネンタマはしなかったようだなあ。」

“gota”は発話者の回想、経験を表す。gaQta, ramuneNtama はいずれも子供の遊びである。L 1(1915 生)、L 2(1920 生)、L 3(1925 生) 姉妹の末妹L 3は姉たちと年が離れているので遊びの種類が違うと話している。

なお、次の(18)では、主語の思いや意思の否定を“gota”を使って表しており、“gota”のあ

とが否定形になっている。

(18) kb.4 <u n="2286" sp="L 3">

haa naa jaQpa oja-kookoo-si=tai-toki=ni=wa=naa oja=wa nas-i-te ima=wa ata
soQkoso oja-kookoo-si-jo-o-gota-nak-a-toki=ni oja=no oQ:tju-u=gena=de </u>
「はあ、ねえ、やっぱり 親孝行したいときにはねえ 親はなしって。今は、あなた、
それこそ、親孝行したくないときに親がいるって言うそうよ。」

“gota” は文中の主語（今の人たち）の思いを表し、それを nak-a で否定している。

(19) kb.5 <u n="0812" sp="L 1">

moo misa-doN-tatjaa: ba-saN=no rokutjosi hik-e-ba nak-oo-gota-tju:i-jaQ-ta </u>
「もう、ミサちゃんたちは、(私の) 母さんが六調子 (曲名) 弾けば、(感動して) 涙が出る
って言った。」

ここでは実際に泣いてはいないので、gota は比況をあらわしている。Mに、L 1 が自分の母親の話をしている。「(母親の三味線がすごく上手かったので) ミサちゃんたちが、母の三味線を聴いたら、泣きたくなるほど (良かった) らしいと言っていた」と話している。

(20) kb.5 <u n="0457" sp="L 2">

hoNtoN naa atasi=ga-koto omoQ-te uQ-tin-i-jaQ-ta-got-aN moo </u>
「本当。ねえ。(夫は) あたしのこと思って亡くなったかのような。もう。」

L 2 の経験をともなった発話であり、発話文中の行為者 (L 2 の夫) に対する推測である。ここでは、L 2 が、M と姉 L 1 に向かって、L 2 (自分) の夫の話をしている。この発話の直前で、L 2 の夫は銭湯で倒れて亡くなったので 500 円しかかからなかった、と話す、M が驚きのあいづちをうつ。そのあいづちを受けた L 2 の発話である。その後、看病もなく入院費用もかからずありがたかったと続く。なお、uQ- は tin-u (死ぬ) の接頭辞で、同様に uti-mo-os-u とも言う。uti-は接頭辞で、moos-u (死ぬ) につく。

(21) kb.5 <u n="2858" sp="L 2">

are moQ-te kaw-as-e-jor-ar-e-ta-gotaQ-ta </u>
「あれ 持って (義父が私に) 買わせていた。」

“gota” は発話者の過去の習慣の回想を表す。この発話では L 2 の父親が (義父母と同居していた) L 2 を訪ねてきたときの話である。L 2 はときどき実家の父が訪ねてきていたと話している、過去の習慣的な事態を表している。

3. 2. 3. 2. 録音資料中の“gota” が動詞+助詞に下接する例

動詞+助詞に下接する“gota” の例として、動詞+=do gota がある。

(22) kb.4 <u n="2200" sp="L 2">

takumasju-sit:oQ-ta=de wa=ja senaka=doma
maQ-sugu-si-t:oQ=do-gotar-i=doN kjaa-magaQ-ta-tokoro=wa wakar-aN=moN </u>
「しっかりしていたよ、私は。背中は
まっすぐしてるんだけど、こんな曲がったところ (腰) はどうしようもないもん。」

この前後で、L 2 と末妹 L 3 が健康の話をしている。上記の L 2 の発話のあと、妹 L 3 が「いいわよ、内臓がよかったら」と返している、L 2 の思いを“gota” で表しているとわかる。球磨方言の終助詞 =do は、次の (23) のような発話で使うことが多い。あえて gota を用いることで、話者の思いを強める語として使われる。

(23) kb.2 <u n="0435" sp="G1">

(略) ano teNziN-saN=no gozaN-s-u=do</u>

「あの天神様がありますね？（見えるでしょ？）」

(22)の発話でも、L2が目の前にいる妹L3に話している。その次のL2の発話では、「曲がってるここに汗がたまるのよ。」と笑いながら話している。終助詞の確認の=doを“gota”で発話者の思いを強めていると考えられる。

4. “gota”についての疑問と考察

これまで“gota”について考察するうちに、球磨方言ででてくる“gota”と“gotar-u”には違いがあるのではという疑問がうまれた。その理由を以下で述べる。

4.1. “gota”に対する疑問

“gota”は“goto+ar-i”と考えるのは容易である。しかし、もし“gota”の中に“ar-i”が含まれると解釈すると以下の用例での疑問がでてくる。

(5) kb.5 <u n="1559" sp="L 1">

jeigo=no-gota-goza-Ns-u=mo</u>

「英語みたいでございますもの。」

(6) kb.5 <u n="1229" sp="L 1"> (一部略)

are=no-gota-sur-u=ba=naa</u>

「あれみたいになればねえ。」

“gota”を goto+ar-i あるいは、gotok-u+ar-i と考えるとすると、gota の中に ar-i が含まれている。しかし、(5) のように、gota の直後に ar-i の丁寧語あるいは尊敬語である goza-Ns-u がくることがあるのだろうか。また、(6) でも、ar-i のあとに sur-u が続くことになる。

そこで、“gota”そのものに ar-i が含まれているとすれば、gota はどのような活用をするのか、ネイティブチェックを行った。(次節)

4.2. “gota”の活用

(20) kb.5 <u n="0457" sp="L 2">

hoNtoN naa atasi=ga-koto omoQ-te uQ-tin-i-jaQ-ta-got-aN moo</u>

「本当ねえ。(夫は)あたしのこと思って亡くなったみたい。もう。」

(20) にみられる“gota”の活用は次のとおりである。

ネイティブチェック(2018/1/30 人吉市在住、前田康江氏による)

gotar-u の活用

-gota- (-gotar-a),

-gota- (-gotaQ-, -gotaN-, -gotar-i),

-gota- (-gotaQ, -gotaN, -gotar-u, -gotar-i),

-gota- (-gotaQ-, gotar-u-),

-gota- (gotaQ-, -gotaN-, gotar-e-, -gotar-u-),

-gotar-e

球磨方言は撥音、促音が多いが、上記の活用のように“gota”が綺麗にそろうものだろうか。もしかすると、現在の球磨方言では、“gota”と“gotar-u”は何らかの異なるものではないか、と思ひ、活用を詳しく伺ってみたところ、命令形で次のようなものがあるとわかった。

gorar-u の命令形

koko=ni gotar-e.

「ここに 来なさい。」

gotar-e という命令形には「ここにあれ」という存在の意味があり、この用法以外の gotar-e は聞いたことがないそうだ。koko=ni gota. とも言えないという。

4.3. ネイティブ話者の作例 形容詞+”gota”

筆者の感覚では、”gota”と“gotar-u”は異なるものかもしれないという思いが強く、さらにネイティブチェックを行った。今回は、“gota”が形容詞に下接するとき球磨方言話者はどのように考えるのかというものである。なお、これは、2018.1.28 に筆者が共通語の作例を挙げ、人吉市在住の前田一洋氏に球磨方言になおしていただき、さらに詳しく意見を伺ったものである。なお、作例で「あの人は偉そうだ」あるいは、「あの人は偉いらしい」とすると解釈によって意味がかわるため、少々不自然さは残るがここではあえて「あの人は偉いようだ」という作例にした。

例1 あの人は偉いようだ。(“gota”で表現)

aN-mae=na erak-a-gota.

あの人は 偉いようだ。

上記例文の助詞 =na は =no でも構わないという。球磨方言には “gota”と“gotar-u”が混在するため、“gota”と“gotar-u”では発話者の思いが異なるのではと考え、同じ共通語訳の作例で“gotar-u”を使ってもらった。

例2 あの人は偉いようだ。(“gotar-u”で表現)

aN-mae=na erak-a-gotar-u.

“gotar-u”を用いたとき、発話者の思いは “gota”とは異なるそうだ。例1の “gota”の文でも発話者自身の思いであることには変わらないが、“gotar-u”を使うと「確信」「断言」の意味になるという。よって、“gotar-u”を文末に持ってくると「確信」を伴い、“gota”と“gotar-u”には違いがあるとわかった。次に、“gota”を「比較」の意味で使うときについて、次の例3、例4を作った。球磨方言訳は前田一洋氏である。

例3 あの人の 団子汁の方が美味しい。(“gota”を用いた文)

aN-mae=no dago-ziru=N-hoo=ga Nmak-a-gota.

この文では、「(まだ食べてないけれど、見たところ) あの人の団子汁の方が美味しそうだ。」という意味になるという。

次に、“gotar-u”を使った場合、どのような違いが見られるかを伺った。

例4 あの人の団子汁の方が美味しい。(gotar-uを使った場合)

aN-mae=no dago-ziru=ga Nmak-a-gotar-u.

例4の意味は「(実際に食べてみたところ) あの人の団子汁の方が美味しかった。」となるそうだ。助詞=noに関しては、=Nでも良いとのことだが、例3, 4を言い直してもらったときに、自然と=noを用いていたので、=noの方が自然なのかもしれない。(=Nは例3で重なるので自然と避けているのかもしれない。)ここで、例4が例3と違うところは、例3の “gota”文では、“=N-hoo(の方)”が入っている。ネイティブ話者は、“gota”文のときに、相手に分かりやすく “=N-hoo(の方)”を入れるのが自然なのだという。

一方、“gotar-u”文は、「食べてみて確信が持てたとき」に使い、“=N-hoo (の方)”は省略してもよい。つまり、経験を伴った確信の時に“gotar-u”を使う。この場合、助詞は両方とも=gaのみである。球磨方言の助詞は多様で、比較的自由に使えるものも多いのだが、ここでは=gaのみであるという。球磨方言の高年層話者が=gaを使うときには、強め、ネガティブ、謙遜、卑下のときにでてくることが多い。新しく聞いた語や外来語にも使うことがある。小話や良からぬ噂でもよくみられた。日常会話の中では、発話者にとってネガティブに感じる相手の行動、事件、相手の人柄の話をするときに=gaの多用がみられる。=gaは発話者のネガティブな思いを乗せるとともに、強い断定の助詞でもある。その助詞=gaを“gotar-u”と一緒に用いることで発話者の思いを表しているのかもしれない。

よって、これらのことから、“gota”と“gotar-u”を使うときの発話者の思いには違いがあるようで、少なからず文脈にも影響している。

4.4. “gota”と“gotar-u”の別の側面

ここで、球磨方言ででてくる“gota”と“gotar-u”には違いがあると思えるさらなる例を示す。

(18) kb.4

<u n="2286" sp="L 3">haa naa jaQpa oja-kookoo-si=tai-toki=ni=wa=naa oja=wa nas-i-te ima=wa ata soQkoso oja-kookoo-si-jo-o-gota-nak-a-toki=ni oja=no oQ:tju-u=gena=de </u>

「はあ、ねえ、やっぱり、親孝行したいときにはねえ、親はなして。

今は、あなた、それこそ、親孝行したくないときに親がいるっていうそうよ。」

“gota”は文中の主語(今の人たち)の思いを表し、それをnak-aで否定している。“gotar-u”には“gotar-aN”という例がみられるのに、なぜここでは“gota nak-a”と発話しているのだろうか。

この例でも、“gota”と“gotar-u”は異なるものである可能性が高い。引き続きこの疑問を考えていく。

おわりに

“gota”は名詞、名詞+助詞、形容詞、動詞、動詞+助詞に下接し、発話者の思いを反映している。“gota”そのものも活用し、複語尾をとることもできる。また、活用に関しては、活用の形が変わらない“gota”という活用も含んでおり、また、球磨方言特有の撥音、促音を伴った活用もする。

本稿を進めてきた中で、球磨方言話者は“gota”と“gotar-u”を使い分けているのではという疑問がでてきた。それをネイティブチェックによって、少し確信できた。発話者は“gota”と“gotar-u”を使いわけること、その事態や様子について、確信や経験を伴った自分の思いを聞き手に伝えている。小さな違いであるようだが、その微妙なニュアンスを感じとり使い分けることは、この地域の人間関係の向上に大事なこともかもしれない。

参考文献

- 尾上圭介 (2016[2001]) 「叙法論としてのモダリティ論」『文法と意味 I』東京:朝倉書店。
 ——— (2016[2001]) 「国語学と認知言語学の対話 II・モダリティをめぐる」
 『文法と意味 I』東京:朝倉書店。
 ——— (2016[2001]) 「文の構造と”主観的”意味—日本語の文の主観性をめぐって・その 2—」『文法と意味 I』東京:朝倉書店。
 金田一春彦 (1982) 『日本語セミナー 二』東京:筑摩書房。
 久野暁 (1973) 『日本文法研究』東京:大修館書店。
 坂詰力治 (2011) 『中世日本語論功』東京:笠間書院。
 築島裕 (1987) 『国語学叢書 3 平安時代の国語』東京:東京堂出版。

- 角田太作（1988）「オーストラリア原住民語」『言語学大辞典 第1巻 世界言語編（上）』東京：三省堂。
- 角田三枝（2007）「日本語動詞の活用表」『立正大学國語國文』45：1-7.
- 山田孝雄（2000[1950]）『世界言語学名著選集 第Ⅲ期 東アジア言語編（2） 第1巻 日本文法学要論』東京：ゆまに書房。
- 日本語文法学会（編）『日本語文法辞典』（2014）東京：大修館書店。
- 渡辺実（1971）『国語構文論』東京：塙書房。
- （2013[1996]）『日本語概説』東京：岩波書店。

本稿は東京大学名誉教授尾上圭介先生の「文と述語」講義にヒントを受け、2018年1月末にレポートとして提出した分の一部を加筆修正したものである。

本稿においては言語学研究室の西村義樹先生に御助言を賜りました。また言語学研究室の研究会でも参加者の皆様から貴重なコメントを頂き本稿に反映しております。

インフォーマントの方々、ネイティブチェックを下さった前田一洋氏・康江氏ご夫妻にこの場をおかりして御礼申し上げます。

Usage of “*gota*” in Kuma Dialect in Kumamoto Prefecture

Ayako Ono

Keywords: Kuma dialect, *gota*, corpus

Abstract

This paper describes the grammatical properties and discourse functions of “*gota*” in Kuma dialect of Kumamoto prefecture as it appears in a corpus. “*gota*” occurs after nouns, adjectives and verbs. “*gota*” is rarely attached directly to nouns. There are two kinds of particles, =no and =N that serve to connect “*gota*” to nouns, the whole combination being used as a metaphor, illustration and demonstration of the speaker’s thought. “*gota*” in combination with an adjective is used to describe, remind, convince and guess. The verb that “*gota*” attaches to is in conjunctive form or end-form. This use of “*gota*” also has a negative form and a solicitation form. In the verb + particle pattern, =do is the only particle used.

（おの・あやこ 東京大学人文社会系研究員）